氏　　名	瀬戸　建
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	乙第 1457 号
学位授与の日付	令和 2 年 5 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 1 項第 4 号に該当

学位申請論文タイトル及び掲載誌

成人頻回再発型およびステロイド依存性ネフローゼ症候群に対するリツキシマブの寛解維持および再発予防効果の検討

埼玉医科大学雑誌 47 巻 1 号　　2020 年 2 月 25 日掲載受理

学位審査委員（主査）教授　三村 俊英

（副査）教授　長谷川 元、教授　椎橋 実智男、准教授　小谷 典弘

論文内容の要約（要旨）

【背景】頻回再発型およびステロイド依存性ネフローゼ症候群に対し，治療薬である副腎皮質ステロイドや免疫抑制剤の投与量は必然的に多くなり，副作用による問題がある．小児では寛解維持・再発抑制におけるリツキシマブ(RTX)の有効性が様々な臨床研究によって実証されている．一方，成人例での実績報告は少なく，また投与プロトコールについても確立された方法がない．そこで今回，成人の頻回再発型およびステロイド依存性ネフローゼ症候群に対する，統一投与プロトコールによる RTX で有用性と安全性を検討した．

【対象】2014 年 10 月 6 日から 2019 年 3 月 30 日までに当科で診療した原発性ネフローゼ症候群の症例で，頻回再発型ネフローゼ症候群もしくはステロイド依存性ネフローゼ症候群の患者とした．

【方法】全症例に RTX 375 mg/m2(最大 500 mg)単回投与を 6 か月毎に行い，24 か月で計 5 回投与するプロトコールを採用した．観察期間は，RTX 導入前，投与期間中ならびに終了後の臨床経過であり，副腎皮質ステロイド（プレドニゾロン）や免疫抑制薬の投与量や再発回数等の比較検討した．

【結果】対象患者は 17 例（男性 9 例，女性 8 例）で、平均年齢 37±15 歳で，症例別は微小変化群 11 例，巣状糸球体硬化症 2 例，腎生検未施行 4 例であった．観察期間は中央値 43 ヶ月（11-54 ヶ月）であった．RTX 投与期間中，ネフローゼ症候群が再発した症例は 3 例であった．プレドニゾロンとシクロスポリンについては，両者とも RTX 導入前と RTX 投与期間中および後で投与量が有意に減量されていた．再発回数についても，RTX 導入前と比べて，投与期間中および後で有意に減少していた．また，全例で重篤な感染症等の有害事象は認められなかった．

【結語】成人の頻回再発型およびステロイド依存性ネフローゼ症候群に対し，RTX 単回投与を 6 か月毎に，24 か月間で計 5 回投与するプロトコールは，プレドニゾロン・免疫抑制薬の減量や再発抑制において有用性が認められた．